

[論 文]

## 高校生の自尊感情と自意識

The Relationship of Self-Esteem and Self-Consciousness in High School Students

柴 田 雄 企 Shibata Yuki

吉 戒 聡 美 (黒木記念病院) Yoshikai Satomi

### ABSTRACT

In order to clarify the relationship of self-esteem and self-consciousness in high school students, I performed the Rosenberg self-esteem scale (RSES), the Coopersmith Self-Esteem Inventory (CSEI) and self-consciousness scale. 161 high school students (98 boys and 63 girls) were assessed based on these scales. It was found that there were negative correlations between self-consciousness and self-rejection of CSEI in boys and there were negative correlations between self-consciousness and self-adequacy of CSEI in girls. It was also found that girls demonstrated lower self-esteem scores of RSES compared with boys. The significance of these findings are discussed.

Key words: self-esteem, self-consciousness, high school students

### 問題と目的

近年、多くの国際比較調査において、日本の子どもたちの自尊感情が低いという結果がほぼ一貫して示されている(園田, 2007)。教育や心理臨床場面において、自尊感情の形成は重要な課題であると言える。本研究では、高校生の自尊感情を支えるための心理臨床的関わりのための基礎資料を得るため、自尊感情と自意識について質問紙調査を行うことにした。

自尊感情の発達について、古荘(2009)は、小学校2年生から中学校3年生まで学年が上がるごとに自尊感情が低下し、とりわけ小学校4年生から大きな低下がみられるが、高校1年生では若干の上昇がみられることを報告している。また、男女では女子が低いことも報告している。また、高橋(2009)は、子どもの自己肯定感について、小学4年生、小学6年生、中学2年生を対象に調査している。結果、学年が上がるにつれて、自己肯定感を持ってなくなっていること、さらに中学2年生で性差が現れ、女子の方が低いと述べている。自尊感情は思春期ごろに下降し、その後また上昇する傾向にあるのではないかと推測されている(伊藤, 2001)。

Rosenberg(1965)は、自尊感情を、自己イメージの中核的概念で、自己に対する肯定的または否定的態度であるとしている。そして、自尊感情には、2つの内包的意味がある

とし、自分を「とてもよい (very good)」と感じるものと「これでよい (good enough)」と感じるものとを区別する必要性を指摘している。前者は優越性や完全性の感情と関連し、自分が他者より優れていると思うこと、あるいは自分は他者から優れていると思われると思うことである。一方、後者は自分で自分を受容することである。すなわち、自尊感情には、他者との比較による部分と、内在化された自己評価の部分が含まれている。

Coopersmith (1967) の尺度は、完全性、優越感を含み、「とてもよい」という自尊感情と関連があるとされている (遠藤, 1992)。他方、Rosenberg (1965) は「これでよい」と感じるほど自尊感情が高いと考え、このような自尊感情を測定するために10項目の尺度を作成した。

ところで、荻野 (2012a) は、ジェンダーの視点を含めた自尊感情の育成、指導方法を検討することの有用性を論じている。自尊感情には性差がみられ、女子の方が低い。このことについて、荻野 (2012b) は他者の評価により敏感になることが自尊感情の低下を招くというメカニズムがより女子に強く働いているのではないかと述べている。

Fenigstein, Scheier, Buss (1975) は個人の自己を客体視する傾性を自意識と名づけ、自己への注意の程度を測定するために、自意識尺度を考案した。この尺度は私的自意識、公的自意識、社会的不安の3つの下位尺度から成っている。私的自意識は自分の感情や思考、動機など、本人のみが体験しうる自己の内的側面に注意を向けやすい傾向を指し、公的自意識は他者の目に映る自分、自己の外的側面に注意が向きやすい傾向を示すと考えられている。社会的不安は他者の存在によって不安感を抱く程度を示すとされている。

公的自意識の強い人は、周囲の人からの目や評価をいつも気かけ、周囲の人の視点から自分を見つめる傾向が強い。そのため、自分に対して自己卑下的評価をする傾向も強いと予想される。よって、公的自意識が強い人は自尊感情が低いと考えられる。

自意識と自尊感情との関連については、これまで公的自意識とRosenberg (1965) のいう自分を「これでよい」と考える自尊感情との関連が検討されている。公的自意識と自尊感情に正の相関 ( $r=.30$ ) がみられたとの報告がある (氏原・龍, 2000)。日本労働研究機構のパーソナリティ研究のデータでは、この自尊感情と自意識尺度の相関は、私的自意識とは0.01、公的自意識とは0.09で、無相関であった (押見, 1992)。Turnerら (1978) のアメリカのデータでは、自尊感情との間に、私的自意識は-0.26、公的自意識は-0.26と負の相関が見出されている。先行研究の結果は一致しておらず、自尊感情のその他の側面との関連については検討されていない。本研究では、「とてもよい」という自尊感情と自意識との関連についても検討する。

自意識と自尊感情の関連について検討する際、性差も重要な視点の1つとなる。そこで、本研究では自意識と自尊感情の性差についても検討する。梶田 (1980) は男子の自意識では「自己へのまなざし」が大きな広がりを持っているのに対して、女子では「他者からのまなざし」も共に自意識の中核をなしていることを指摘している。また、菅原 (1984) は大学生を対象に調査した結果、私的自意識、公的自意識のいずれの尺度得点においても、男性より女性の平均得点が有意に高いと報告している。これらの知見から考えると、高校生においても自意識の高さに性差が見られ、自意識と自尊感情との関連についても性差が認められることが予想される。

## 方 法

### 1. 対象者

高校生221名に調査の協力を求めた。このうち回答に記入もれのあった60名を除く、161名（1年生男子49名、1年生女子32名、2年生男子49名、2年生女子31名）を分析対象とした。

### 2. 調査時期

2005年2月に調査を実施した。

### 3. 手続き

自尊感情尺度および自意識尺度を用いて質問紙調査を行った。調査用紙を生徒に渡し、後日回収する留置法をとった。

### 4. 尺 度

#### (1) Rosenberg (1965) の自尊感情尺度 (Self-Esteem Scale)

この尺度はRosenberg (1965) が作成し、山本・松井・山成 (1982) が邦訳したものである。自己への感情的評価の測定尺度で10項目からなる。なお、質問項目への回答は5段階評定（「あてはまらない (1)」、「ややあてはまらない (2)」、「どちらともいえない (3)」、「ややあてはまる (4)」、「あてはまる (5)」）によって実施した。合計得点は10点から50点の範囲に分布する。この自尊感情尺度は自分で自分に満足できているかを測定するためのものである。得点が高いほど自尊感情が高いと解釈される。

#### (2) Coopersmith (1967) の自尊感情尺度

これはBenettら (1971) が作成したCoopersmith (1967) の自尊感情尺度の成人版を遠藤 (1981) が翻訳したものである。50項目から成り、それぞれの項目について、はい(1)、いいえ(0)の2件法で回答を求めた。項目番号1, 3, 7, 8, 11, 13, 14, 15, 19, 23, 26, 27, 32, 34, 35, 37, 38, 39, 41, 44, 45, 46, 48, 50は逆転項目。

井上 (1992) はこの50項目の因子分析の結果として6因子解（「自己の適切性」(項目番号2, 5, 9, 12, 33, 43, 47, 49の8項目)、「自己の不適切性」(項目番号11, 13, 27, 31, 37, 38, 48の7項目)、「自己拒否」(項目番号3, 7, 8, 15, 26の5項目)、「消極的自己・仲間関係」(項目番号39, 41, 44, 45, 50の5項目)、「両親家庭関係」(項目番号6, 23, 30, 33, 46の5項目)、「積極的自己・仲間関係」(項目番号4, 10, 17, 18, 34の5項目))を報告している。井上 (1992) によると、それぞれの因子が示していると解釈される内容は以下の通りである。得点が高いほど、以下の傾向が強いと解釈される。

「自己の適切性」：自分の信念・決断に自信を持ち、くよくよと心配しない傾向。「自己の不適切性」：自分に一貫した信念・信条を持ち、他者に寄りかからない傾向。「自己拒否」：現在の自分を拒否して、別の自己・人格に変わることに欲求が低い傾向。「消極的自己・仲間関係」：友人・仲間内での自己の魅力・能力・信頼感についての評価の低さの認知がない傾向。「両親家庭関係」：両親・家庭と自己の関係が良い傾向。「積極的自己・仲間関係」：他者との接触を好む傾向。

#### (3) 自意識尺度

自意識を測定するために菅原 (1984) による自意識尺度日本語版を用いた。これはFenigsteinら (1975) が作成した自意識尺度 (self-consciousness scale) から社会的不安尺度を省いた私的自意識尺度と公的自意識尺度から構成されている。私的自意識に関する10

項目と公的自意識に関する11項目とから成る。評定は5件法（「あてはまらない (1)」、「ややあてはまらない (2)」、「どちらともいえない (3)」、「ややあてはまる (4)」、「あてはまる (5)」）で行った。合計得点が高いほど自意識が高いことを表すように、各対象者の得点を算出した。

## 結 果

### 1. 自尊感情および自意識における性差

自尊感情と自意識における性差を検討するため、男子と女子の平均値をt検定によって比較した（表1）。Rosenberg（1965）の自尊感情尺度において有意差が見られ、男子の方が女子より高い値であった。また、Coopersmith尺度の「自己の適切性」において有意差が見られ、男子の方が女子より高かった。自意識については有意差はみられなかった。

表1 自尊感情および自意識の性別による比較

		男 子	t 値	女 子
Rosenbergの尺度		30.47 (6.71)	2.19*	28.22 (5.77)
Coopersmithの尺度	自己の適切性	1.76 (1.48)	3.46**	1.02 (1.21)
	自己の不適切性	4.80 (1.51)	n.s.	4.46 (1.58)
	自己拒否	2.82 (1.35)	n.s.	2.59 (1.33)
	消極的自己・仲間関係	2.15 (1.60)	n.s.	2.24 (1.36)
	両親家庭関係	2.90 (1.12)	n.s.	2.70 (1.20)
	積極的自己・仲間関係	3.08 (1.24)	n.s.	3.13 (1.16)
	合計	23.22 (6.77)	n.s.	21.40 (5.80)
公的自意識		3.40 (0.62)	n.s.	3.60 (0.66)
私的自意識		3.13 (0.68)	n.s.	3.33 (0.71)

\*\* p < .01, \* p < .05, ( )内は標準偏差

### 2. 自尊感情と自意識の相関

自尊感情と自意識の関係を検討するため、相関係数を求めた（表2）。

男子高校生では、Coopersmith（1967）尺度の「自己拒否」と公的・私的自意識との間に負の相関がみられた。なお、男子高校生については、Rosenberg（1965）の自尊感情尺度とCoopersmith（1967）の自尊感情尺度（合計）の間には有意な正の相関が見られ（ $r=.57, p<.01$ ）、公的自意識尺度と私的自意識尺度の間にも有意な正の相関が見られた（ $r=.47, p<.01$ ）。

女子高校生では、Rosenberg（1965）の自尊感情尺度と公的自意識尺度との間に弱い負の相関が認められた。なお、女子高校生については、Rosenberg（1965）の自尊感情尺度とCoopersmith（1967）の自尊感情尺度（合計）の間には有意な正の相関が見られ（ $r=.72, p<.01$ ）、公的自意識尺度と私的自意識尺度の間にも有意な正の相関が見られた（ $r=.43, p<.01$ ）。

表2 自尊感情尺度と自意識尺度との相関係数

		男子高校生 (n=98)		女子高校生 (n=63)	
		公的 自意識	私的 自意識	公的 自意識	私的 自意識
Rosenbergの尺度		.02	-.02	-.25*	-.05
Coopersmithの 尺度	自己の適切性	-.13	.06	-.39**	-.37**
	自己の不適切性	-.12	-.11	-.29*	-.07
	自己拒否	-.35**	-.21*	-.14	-.25*
	消極的自己・仲間関係	-.03	.04	-.10	-.18
	両親家庭関係	-.15	-.13	-.18	-.09
	積極的自己・仲間関係	-.00	.00	.04	-.02
	合計	-.16	.01	-.21	-.18

\*\* p<.01, \* p<.05

## 考 察

### 1. 自尊感情および自意識の性差

まず、自尊感情について、先行研究の結果と本研究の結果を比較し、性差について検討する。Rosenberg (1965) の自尊感情尺度では、丸岡 (2006) は高校生男女1~3年生1256名を分析対象とし、26.0の平均値を得ている。山村 (2004) は男子高校生1~3年生319名を分析対象とし、平均値33.02を得ている。本研究の結果は、男子30.47、女子28.22であり、先行研究の結果に近い値であった。

自尊感情の性差について、本研究では、Rosenberg (1965) の自尊感情尺度とCoopersmith尺度の「自己の適切性」で差が見られた (表1)。自尊感情の男女比較については、女子の方が低いということがこれまで報告されており、本研究でも同様の結果であった。自分をこれでよいと感じる自尊感情については女子より男子の方が高かった。

次に自意識について、先行研究の結果と本研究の結果を比較する。菅原 (1984) では、大学生の男女に7件法で回答を求め、公的自意識については、男性52.8、女性56.4、私的自意識は男性50.3、女性54.0の平均値を報告している。これをそれぞれ項目数で割ると、公的自意識は男性4.80、女性5.13となり、私的自意識は男性5.03、女性5.40となる。菅原 (1984) では、4が“どちらともいえない”で、5が“ややあてはまる”で、6が“あてはまる”である。一方、本研究で得られた平均値は5件法で、3の“どちらともいえない”と、4の“ややあてはまる”の間であった。

大学生を対象とした菅原 (1984) の調査では公的自意識、私的自意識のいずれにおいても男性より女性の方が有意に高かったが、本研究では有意な性差はみられなかった。短期大学女子学生を対象とした柴田 (2014) では、本研究と同様に5件法によって、公的自意識48.85、私的自意識42.26の平均値を得ており、それぞれ項目数で割ると、公的自意識4.44、

私的自意識4.23となる。高校生を対象とした本研究では、女子は公的自意識が3.60で、私的自意識が3.33であった(表1)。以上のことから、女子においては、高校生から大学生になると自意識が高くなると推測される。

## 2. 自尊感情と自意識の関係

本研究では自尊感情と自意識の関連について検討するため、高校生を対象に質問紙調査を行った。筆者らは自意識が高いと自尊感情が低くなるのではないかと考えた。そして、自意識は自尊感情のどのような側面とより関連があるのかを検討するため、Rosenberg(1965)の尺度とCoopersmith(1967)の尺度を用いた。結果、Rosenbergの尺度では、女子においてのみ、公的自意識と相関がみられた。このことは女子においては、他者の目に映る自分に注意が向きやすいほど、自分を「これでよい」と感じる自尊感情が低くなるということを示唆している。そして、Coopersmithの尺度については、男子では「自己拒否」と自意識の間に負の相関がみられ、女子では「自己の適切性」と自意識の間に負の相関がみられたことが特徴的であった。このことは、自分を「とてもよい」と感じる自尊感情については、男子においては自意識が高いほど、現在の自分を拒否して、別の人格に変わりたい気持ちが大きいということを示唆し、女子においては自意識が高いほど、自分の信念に自信を持てず、くよくよと心配するということを示唆している。

菅原ら(1986)は、私的自意識は20歳前後で高まるものの後は40代後半に至るまであまり年代による変化はないこと、一方、公的自意識は10代から20代で高く、その後、40代後半まで加齢とともに低下することを報告している。このことと本研究の結果をあわせて考えると、加齢とともに公的自意識が低下すれば、公的自意識と相関のみられた自尊感情の側面は高まるのではないかと考えられる。

## 引用文献

- Benett, L. A., Sorensen, D. E., & Forshay, H. 1971 The application of self-esteem measures in a correctional setting: 1. Reliability of the Scale and Relationship to Other Measures. *Journal of Reseach in Crime and Delinquency*, 8, 1-9.
- Coopersmith, S. 1967 *The Antecedents of self-esteem*. San Francisco: W. H. Freeman.
- 遠藤辰雄・井上祥治・冷川昭子・藤原正博 1981 自尊感情の測定 遠藤辰雄(編) *アイデンティティの心理学* ナカニシヤ出版 pp.64-84
- 遠藤由美 1992 個性化された評価基準からの自尊感情再考 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋(編) *セルフ・エスティームの心理学* ナカニシヤ出版 pp.57-70
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., Buss, A. H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527.
- 古荘純一 2009 日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか 光文社
- 井上祥治 1992 セルフ・エスティームの測定法とその応用 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋(編) *セルフ・エスティームの心理学* ナカニシヤ出版 pp.26-36
- 伊藤裕子 2001 青年期女子の性同一性の発達－自尊感情、身体満足度との関連から－*教育心理学研究*, 49, 458-468

- 梶田叡一 1980 自己意識の心理学 東京大学出版会
- 丸岡里香 2006 高校生の自尊感情と健康行動に関する調査 浅井学園大学短期大学部研究紀要, 44, 65-73
- 荻野佳代子 2012a 小・中・高校生における自己概念の発達－自尊感情育成におけるジェンダー視点からの考察を含めて－ 神奈川大学心理・教育研究論集, 31, 49-56
- 荻野佳代子 2012b 小・中・高校生における自己概念の発達Ⅱ－自尊感情育成における他者との関係に焦点をあてて－ 神奈川大学心理・教育研究論集, 32, 37-42
- 押見輝男 1992 自分を見つめる自分 自己フォーカスの社会心理学 サイエンス社 pp.66-67
- Rosenberg, M. 1965 Society and the Adolescent self-image. Princeton: Princeton University Press.
- 柴田雄企 2014 短期大学女子学生の自己価値と自意識 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 51, 37-42
- 園田雅代 2007 今の子どもたちは自分に誇りを持っているか－国際比較調査から見る日本の子どもの自尊感情 児童心理, 61 (10), 2-11
- 菅原健介 1984 自意識尺度 (self-consciousness scale) の日本語版尺度作成の試み 心理学研究, 55, 133-140
- 菅原健介・山本真理子・松井豊 1986 Self-Consciousnessの人口統計学的特徴 日本心理学会第50回大会発表論文集, p.658
- Turner, R. G., Scheier, M. F., Carver, C. S., & Ickes, W. 1978 Correlates of self-consciousness. Journal of Personality Assessment, 42, 285-289
- 山本真理子・松井豊・山成由起子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68
- 山村 卓 2004 男子高校生の自尊感情に関する研究 早稲田大学大学院教育学研究科紀要, 別冊12号-1, 193-202

## 付 記

調査にご協力していただきました生徒の皆さんと、調査のとりまとめをしていただいた高校の先生方に深謝いたします。